

北海道がんセンター通信

2021

第 59 号

NOVEMBER



CONTENTS

●北海道がんセンター、令和のグランドオープン	院長 加藤 秀則 ……	2
●グランドオープンに寄せて	名誉院長 西尾 正道 ……	3
●新病院グランドオープンに寄せて 40年の想い	副院長 永森 聡 ……	4
●北海道がんセンター 新築グランドオープンによせて	副院長 高橋 将人 ……	5
●新病院開院までの道のり	事務部長 檜舘 和則 ……	6
●グランドオープンに寄せて 「患者さんに優しく 職員が働きやすい病院に・・・」	看護部長 工藤 千恵 ……	7
●グランドオープンに寄せて	薬剤部長 美濃 興三 ……	8
●放射線診療部放射線科のご紹介	診療放射線技師長 盛 洋一 ……	9
●グランドオープンに向けて 〈検査科紹介〉迅速に正確に	臨床検査技師長 灘 雅雄 ……	10
●地域医療連携室からのお知らせ		11
●がん検診のご案内		12

北海道がんセンターの理念
私たちは、国民の健康のために、良質で信頼される医療の提供に努めます。

(基本方針)

- 1 都道府県がん診療連携拠点病院の使命を果たします。
- 2 常に医療の質と技術の向上を目指します。
- 3 医療安全を確保し、安心できる医療を提供します。
- 4 患者さんの権利を尊重し、誠実な医療を実践します。
- 5 研究、教育研修を推進し、医学・医療の発展に寄与します。

北海道がんセンター、 令和のグランドオープン



院長 加藤 秀則

病院が老朽化してきたので建て替えるを論議しだしたのは10年少し前だったと思います。現在地は市の中心にあり便利至極ですが、当時は敷地の関係から現地での建て替えは不可能であり、他の地への移転を検討せざるを得ませんでした。

今だから明かしますが、当時休院となっていた旧国立札幌南病院の跡地に、北海道のがん診療の拠点（がんセンター）とそれに付属した広くて静かな緩和病院、難病・慢性疾患などの療養病院、触法病棟（重大犯罪を犯した患者さん

令和3年10月15日新病院と附帯施設が最終完成致しました。新病院は昨年より稼動しておりましたが、新玄関とその前の駐車施設などの最終工事が終わりました。関係した職員のご協力、外部の関係者のご支援、行政・医師会などの各団体のご指導、町内会の皆様の騒音・塵埃に対するご理解、コロナが猖獗している時に集団発生せず工事を進行させていただいた工事関係者の皆様、工事中の狭い院内で我慢して治療を受けていただいた患者さんたち等々、多方面への感謝の気持ちでいっぱいであり、改めて物事は人の尽力・協力無くして成就しないことを感じました。



本館 南面

の精神疾患を治療する病棟：当時北海道には無く設置が切望されていましたが）などをまとめた広範な分野を包括する療養施設を作ったかどうか、という構想が提案されたこともありました。

しかし、諸事情で実現はしませんでした。次には、白石区内の某所に広い更地が手に入りそうなので、そこに四角くて高層の（すなわち工期が早くて、建設費も安い）病院を建てることで決まりそうになりました。その時、現病院の向い、西側・地下鉄駅側にあった私設駐車場の所有権が相続し、急遽売っても良いということになりました。それまで断固拒否でしたので我々には青天の霹靂でした。加えてその間の市道も申請で病院の敷地に使える可能性があるという市議の示唆もあり現地での建て替に変更決定となったのでした。市道は手に入りませんでしたが、その後狭い土地と向えの新しい土地とを駆使して、3期4年に渡る難工事の末に現病院が完成しました。

詳述はしませんが、がん診療に関わる診断・治療施設は新しく高品質なものを揃えたつもりです。ただ、それに劣後しないようなスタッフの業務遂行能力の向上、様々な仕事を安全・高効率・高品質で実行できるシステムの構築にも努力して参ります。何かあれば、皆さんからも忌憚なきご意見をいただきたいと思います。

今後とも宜しく御指導下さいますようお願い申し上げます。

グランドオープンに寄せて



名誉院長 西尾 正道

新病院の新築工事が終わり、グランドオープンとなり本当におめでとうございます。心からお喜び申し上げます。私が退職後、院長となられた近藤啓史先生が当院の歴史を詳細に調べて報告されているが、それによると当院は、月寒の地に1896年札幌陸軍病院として創立され、終戦後1945年12月厚生省に移管されて、国立札幌病院として発足した。その後1952年に現在地に月寒より移転し、16診療科450床の鉄筋化された建物で総合病院として診療を開始した。

1962年築地に国立がんセンター病院が開院したが、その後、各都道府県で、がんセンターとしての施設を開設し、がん診療に乗り出した。これはがん治療の特殊性にも関係しているためである。糖尿病などの生活習慣病では、食事療法・運動療法などでコントロールできなければ、経口薬の投与が行われ、それでもだめならばインシュリン注射により治療できる。しかし、がん治療においては、再発や転移が起これば、救命することは容易ではなく、最初の治療が重要であり、症例によっては【only one chance】である場合もある。このため専門性の高いがん診療が重要であることが認識され、全国各地にがんセンター的な施設ができたのである。

こうした流れの中で、1967年に北海道及び関係機関のがん診療に対する要請と支援によりがんセンター機能が国立札幌病院に併設され、1968年がん病棟100床が増築され、道内で初めての放射線治療機器も導入され、病院名も『国立札幌病院・北海道地方がんセンター』となった。

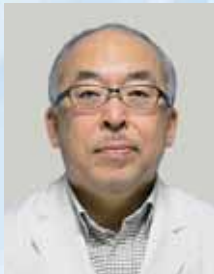
その後、1979年から7期にわたって建物等の更新築工事が施工され、1986年に完成をみた。また2004年4月には独立行政法人化した際に、『北海道がんセンター』と改名した。また併設していた第3次救命救急センターの診療機能は2010年3月より新設された北海道医療センターに移し、がん診療に軸足を置く施設となった。しかし、この頃から病院施設の老朽化が問題となったが、基本的に独立採算制となり、赤字であったため。新病院の新築は困難であったが、歴代の院長先生達の努力で漸次経営改善し私が院長職を引き継いだ年には、収支率が100%となっており、赤字経営から黒字経営に転換し、収支率107%程度まで改善したので、近藤院長先生の時代に機構本部から新築の許可が下り、今回新病院のグランドオープンとなった経過である。

2007年に成立した「がん対策基本法」のもとに、全国でがん診療の“均てん化”が図られているが、その一環として、当院は2009年2月に、北海道の「都道府県がん診療連携拠点病院」として指定された。

私が当院に就職した1974年は日本のがん患者数は約20万人だったが、2017年には100万人を超えている。がんは生活環境病であり、放射性微粒子の体内取込みや、ホルモン環境の変化や、化学物質、大気汚染、ウイルスなどの感染による環境因子が発がんの原因となることも明確となってきた。今後もがん罹患者は増加するが、道内のがん診療の中心的な施設として道民のためのがん診療に寄与して頂ければと願っている。



新病院グランドオープンに寄せて 40年の想い



副院長 永森 聡

私事で大変恐縮ですが、小生はちょうど40年前の1981年に北大医学部を卒業し、1982年に1年間だけでしたが当院に泌尿器科研修医2年目として第一回目の赴任を果たしました。しかし実は当時札幌市内の総合病院は、泌尿器科研修病院としては不人気で、同期5人でくじ引きをして、最もハズレを引いた小生がこの病院に決まったといういきさつがありました。赴任前には前々病院が取り壊されて新病院（前病院）として落成する等と言うことも全く知りませんでしたし、当時はたった1年間の赴任なのに引っ越しは面倒くさいなど不埒な考えも無かったわけではありませんでした。しかし真新しい新病棟に実際に引っ越してみると、全てが新鮮であり、ゲンキンなものでこれでさらに良い医療が出来るのだと勝手に気持ちが高ぶり、移植医療を志して泌尿器科に入局したものの、2年目で早くも目標ががん治療に変わったのを良く覚えております。

その後1993年には、今度はがん治療を志す自分の意志で泌尿器科固定医として第2回目の赴任を果たし、現在に至っております。前病院は当時としては当たり前でしたが冷房も無く、病室は殆どが6床の大部屋でした。1993年当時は病院の設備等には殆ど不満も感じませんでしたが、その後市立札幌病院や、北大病院も新築で冷房完備となり、前回の赴任の時に高ぶった気持ちはどこへやらで、何故当院だけが患者さんにも職員にも厳しい環境なのだろうかと何度も思ったものでした。

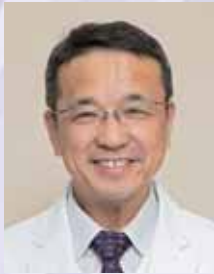
そして今回、計画段階から新病院の建設に深く関わることが出来ただけではなく、最新の設備が整った新病院のグランドオープンまで、40年の時を経て現役の職員でまた立ち会うことが出来たことに何故か因縁めいたことも感じています。また小生の一番末の息子が泌尿器科医として、昨年10月より半年間の研修で前病院に赴任してきており、昨年11月には小生同様新病棟移転に立ち会うという、親子二代で当院の歴史の大きな節目に巡り会う事は、とても感慨深いものでありました。コロナ禍の中で私的には数少ない良かった出来事のひとつでした。

最後になりましたが、当院は北海道のがん治療のトップランナーとして今後も邁進し続ける事をお約束して40年の想いを述べさせていただきました。



ダヴィンチ手術風景

北海道がんセンター 新築グランドオープンによせて



副院長 高橋 将人

北海道がんセンターの新築移転もいよいよ2021年グランドオープンの日を迎えました。今から5年以上前の移転計画の最初から係わってきたメンバーの一人として大変感慨深く思います。

この新築移転計画として特徴的であり、また最も大変であったことは、あまり広くない敷地内に移転するために旧病院の取り壊しと新病院の建設をⅡ期半に分けて行った事です。特にせまい敷地内で使いやすい新築病院を建設するために、旧病院の病棟の一部を取り壊しながら入院病床を運用した事は、病院内や地域の方々への騒音や粉塵などの問題を最小化しながら進めなければならず、当初の計画以上に大変な工事となりました。ご理解いただいたその当時の入院患者さん、病院の近所の方々のご理解ご協力に大変感謝したいと思います。この場をお借りしてお礼を申し上げます。

このいわゆるⅡ期といわれる旧病棟の取り壊しとその跡地に新築病院を建設している時期に、2つの大きな出来事がありました。1つは2018年9月6日に発生した北海道胆振東部地震です。早朝突然の大きな揺れが札幌市内にも発生し、全道が停電となりました。その1ヶ月前に完成した管理棟、外来の検査部棟に関連部署が引越した直後でした。新病院が空中廊下で接続されていたのが原因で、接続部分の建材に一部亀裂が新築早々入ってしまったのは残念だったのですが、旧病棟の取り壊しがまだ開始しておらず耐震に問題ない状態であったことが幸いでした。

またもう1つの大きな出来事は、コロナのクラスター感染が発生してしまった事です。今から考えると本当にタイミングの悪い時期でした。旧病棟の一部を取り壊していたため、かなり密な状態で入院患者を診なければなりません。PCR検査などの体制も整っていなかったため、保健所に依頼し検査可能な人数はかなり限られており、封じ込め対策が大変困難を極めました。現在の新病棟と違い換気設備が不十分だったことも感染拡大の要因だったのかもしれませんが。新病棟に移った後も、病棟でコロナ患者が発生した場合のシュミレーションや対応病室の確保、入院時に患者さんは徹底的にスクリーニングをさせていただいています。あの頃のつらい経験が新病棟になっても活かされており、より安全な病院になったと思います。

新病院建設にあたっては事前に図面を十分に検討して建設したつもりでしたが、新病院を使用してみると計画段階でこうしておけば良かったという点は確かにあります。ただ同時に図面で計画し考えていたよりも、実際には立派に出来上がったと思う気持ちもあります。今後はがんで苦しむ方を一人でも救うことが出来るように、職員皆が力を合わせて、この新病院で頑張っていきたいと思っています。



本館 2階・EVホール



本館 1階・エントランスホール

新病院開院までの道のり



事務部長 檜舘 和則

この度4年半にわたる工事を無事終え、新病院の全面オープンを迎えることができました。難工事に携わられてきた関係者の皆様、工事期間中ご迷惑をお掛けした患者さんや地域の皆様方に感謝申し上げます。

旧病院は現有地よりも手狭な敷地に1979（S54）年から7期8年を掛けて建設したもので、その後も増改築を繰り返し継ぎ接ぎだらけの迷路のような建物構造に加え、駐車場も40台程しかなく入場待ちの車が長蛇の列を作るような状況が長らく続きました。

転機は独立行政法人移行後に赤字経営から黒字経営に転換した頃だと思っています。当時は市中病院の新築整備が相次ぎ、老朽化が進み6人部屋が半数を占めエアコンも未整備の当院の療養環境の悪さが目立ち始めた頃でもあり、新病院建設の機運が一気に高まりました。

初めは誰もが「夢物語」のように想っていたに違いありませんが、大きな目標ができたことにより、西尾・故近藤元院長等のリーダーシップの基に年々経営基盤が強化され建替資金の借入目処も立つようになりました。

しかし、問題は建替用地の確保でした。紆余曲折の末に現在地での建替となりましたが、当初は現在地での建替は困難との判断から別地での建替を模索している中、縁あって市道を挟んだ隣接地（現在の別館棟）を取得する運びとなりました。取得費用は豊平区月寒に所有していた宿舍用地を隣接する学校法人希望学園（札幌第一高等学校）へ売却して充てました。

その後、機構本部との調整や設計等を経て2017（H29）年4月に工事着工となりましたが、最大の難工事は先行工事として、病棟の一部を切断し解体する工程であったと思います。避けては通れない工事とは言え、病棟内には騒音と振動が約半年間続きました。粉塵対策のため窓も開けられない劣悪の環境の中で、患者さんはよく耐え忍んでくれたと思います。

また、昨年は新型コロナウイルスのクラスターの影響があり病棟移転が2月遅れましたが、多くの皆様方からご支援をいただき今日を迎えることができました。改めて御礼申し上げます。

この新病院の機能を最大限発揮できるよう職員一同精進して参りますので、今後とも変わらぬご指導ご支援をよろしくお願いいたします。



旧病院（平成7年秋撮影）



先行解体エリア

グランドオープンに寄せて 「患者さんに優しく職員が働きやすい病院に…」



看護部長 工藤 千恵

全面建替工事着工から4年余りの歳月を経て、この度グランドオープンとなりました。前病院は1986年の完成であったとお聞きしています。大講堂では、さまざまな研修や会議が行われ足を運ぶことが多い病院でした。その病院が全面建替整備と聞いたときには、さらに大きく機能的な病院になることに羨ましさを感じたことを思い出します。

この4月に赴任して以来、病棟や外来をラウンドして思うのは、設計のところに携わった看護部長さんから、「職員が動線よく仕事できる」ということを考慮してほしいと願って設計を依頼したということです。私たち看護師が業務遂行するうえで動線がいい構造・設備であることは、看護師が患者さんの近くにおり、お待たせしない看護ができることです。まさに、「患者さんに優しく職員が働きやすい病院」です。

病棟は1つのフロアに2つ、中央の廊下で南北のナースステーションが繋がっています。これは緊急時の応援体制もとれることになり看護師の安心にもなりました。さらに、ナースステーションは広く多職種間のカンファレンスも十分行え、学生にも居場所を提供できる良い環境が生まれました。患者さんには各病室の近くにトイレを配置、遠くまで歩くことなくトイレに行けるので治療を受ける患者さ



本館 8階・ナースステーション



病棟



特室



緩和ケア病棟デイルーム

んには安心・安全です。また、病室が広く患者さんのプライバシーが尊重され、辛い治療を受ける入院生活での安堵にも繋がっていると思います。

看護師たちは工期の間、新病院では患者さんに良い療養環境が提供できる、私たちも気持ちよく勤務できると期待をもち、その工期期間の病棟編成を乗り越えてきたと聞いています。長く勤務されている看護師、昨年・今年に入職した看護師にとっても待ちに待った新病院です。この病院をさらに良くしていくのは私たち職員です。当院の「都道府県がん診療連携拠点病院」としての役割に看護としても貢献できるよう努めなければなりません。各看護師のがん看護をしたいという志をより高め、さらにより良い看護が提供できるよう切磋琢磨していきます。最後に、多くの方々のお力添えがあり新病院がグランドオープンしたことに本当に感謝いたします。今後ともよろしくご指導下さいますようお願い申し上げます。

グランドオープンに寄せて



薬剤部長 美濃 興三

いよいよ、すべての工事が終了してグランドオープンを向かえました。薬剤部のスタッフ一同も、大きな喜びを感じながら日々の業務に取り組んでいます。

薬剤部は地下1階と2階にありますが、主要部分は地下1階となります。入院患者さんのお薬の調剤や製剤の調製、注射薬の供給などを行っています。

新棟への移転に際して、壁のないメインフロアの中心に医薬品棚を配置して、調剤業務、注射業務など各業務間の移動が効率的に行えるレイアウトとし、さらに医薬品情報室、薬剤管理指導や病棟業務を行うための環境の整備も行いました。

今般、医薬品流通の過程においてさまざまな事件が起こり、医薬品の安定供給が非常に危いものとなっています。患者さんの治療に必要な医薬品を確保し、医療安全を遵守しながら調剤、交付をしていくこと、そして、使用後の医薬品の効果や副作用をモニタリングして薬学的な視点からチーム医療に参画していくことが大切と考えています。

新棟では、外来化学療法のアメニティの向上と推進のため、30床の外来化学療法室が整備されました。このため、外来化学療法室の隣に無菌的な環境下で抗がん剤の混合調製を行う専用の部屋を整備して、薬剤師が治療内容の確認とすべての抗がん剤の無菌調製にあたり、さらに治療中の患者さんに対して化学療法の効果や副作用に関する説明とフォローも併せて行っています。

また、新しい取り組みとして「薬剤師外来」を開始しました。近年、効果の優れた経口抗がん剤の開発が進みより高度な薬物療法を外来で行うことが可能となっており、当院においてもがん専門・認定薬剤師が治療に継続的に関わり、効果や副作用の発現状況、副作用対策薬の使用状況と効果などをお聞きして医師と情報共有を行っています。

また、患者さんが在宅において困った状況となった時に対応するため、保険薬局との情報共有による切れ目のない薬学的管理を行って、安心して治療に臨めるように患者さんの薬物療法をサポートしていますのでよろしくお願いします。



抗がん剤の無菌調整

放射線診療部放射線科 のご紹介



診療放射線技師長
盛 洋一

放射線診療部放射線科は診療放射線技師23名（診断部門12名、核医学部門2名、治療部門9名）、受付2名が在籍しております。昨年は新型コロナの影響で検査や治療に制限がかかり大変な一年となりました。未だに予断を許さない状況が続いている中、感染対策を徹底し患者さんが安心して検査・治療を受けられるようスタッフ一同奮闘している毎日です。

2018年9月に新棟1期工事完了後に放射線部門は全面移転しました。診断部門ではMRIが増設され2台体制となり、予約待ち日数が解消され当日オンコール検査に迅速に対応できるようになりました。またPET-CT装置の導入で同一寝台での撮像が可能となり位置情報の精度が向上し病変の部位をより正確に評価することが可能となりました。

図3 MRI装置



図4 PET装置



図5 リニアック装置



図1 画像診断用CT



図2 血管撮影装置



さらに256列マルチスライスCTの最新装置への更新、IVR-CT搭載の血管造影室、循環器用血管造影室の更新と大きく診断能力が向上しました。

治療部門は3台体制のリニアックのうち1台が全面移転のタイミングで高精度放射線治療機器に更新となり、付随していくつかの周辺機器も新規導入・更新となったことから、より多くの強度変調放射線治療（IMRT）や定位放射線治療（SRT）に対応可能となりました。また、2020年9月に旧病棟に設置されていたRALS装置をCT装置同室の密封小線源治療室に移設したことで、画像誘導密封小線源治療（IGBT）にも対応可能となりました。

また当科では、低線量肺がんCT検診、PET検診、乳がん検診（マンモグラフィー）等の検診業務に取り組んでおり、その中でPET検診は検査終了後、放射線診断医が説明を交えながら結果をお伝えするという当院独自の取組みを行っており、後日診断結果を発送するのみの検診と違い結果が出るまでの不安感などが軽減されるため受診者様にとってメリットの大きい検診であると考えられます。他に、地域の医療機関様からのお申し込みを受けて、CT・MRI・RI・PETなどの検査のみを行う「医療機器の共同利用」を実施しております。検査画像は検査翌日に放射線診断科の医師による読影レポートと合わせて郵送いたしますので是非ご利用ください。

グランドオープンに向けて 〈検査科紹介〉 迅速に 正確に



臨床検査技師長
灘 雅雄

北海道がんセンター グランドオープンに際しまして、臨床検査科の「迅速かつ正確な検査」を実践するための設備と取組みをご紹介します。

北海道がんセンター臨床検査科は血液検査、病理検査、超音波検査を含む生理学検査、そして感染症の病原体を検索する細菌検査等広範囲の検査項目をカバーした検査室です。

患者様から採血した血液検体は年間7万件を超えます。特に、外来採血は年間5万件に達し、迅速かつ正確を目標に日々運営しております。その迅速な対応をするために、検査室にはカラクリがあります。

今回は検体検査室のカラクリを中心に紹介します。検査室は病院2階にありますが、舞台裏的な構造で検査室出入口すらわかりづらい構造です。裏があるなら表舞台は病院2階の採血室です。

採血室は6つの採血ブースを有し番号発券機を使用して大型ディスプレイと音声で呼び出す、最新設備を導入しています。実は、採血室奥側の小窓から、舞台裏の検査室へと繋がっています。採血済み検体の搬送口となっております。採血室の裏側は壁一つ挟んで沢山の検査機器が並ぶ検体検査室です。つまり、採血された検体は搬送時間ゼロで、検査室に搬入されます。検査時間短縮に大きく貢献しております。これが検体検査室のカラクリです。

また、採血室隣の採尿室も尿カップ置き場で検体検査室と通じています。さらに、検査自体も高速化しています。多項目生化学分析装置は採血管のゴムキャップ開栓から機械装填まで全自動で行われます。多項目分析装置を複数台設置することにより、高速大量検体処理が可能となりました。



採血室・採血ブース
奥側の小窓が、検体搬送口



検体検査室・沢山の機器
中央奥の小窓が検体搬送口

迅速かつ正確に関して、迅速のお話をしましたが、正確のことも紹介させていただきます。臨床検査科は国際認証である、臨床検査室の認定ISO15189を取得する準備を進めています。これには正確な検査結果を提供できていることを保証するものです。大変審査基準が高く、検査スタッフ一丸となって努力しています。



地域医療連携室からのお知らせ



～ご紹介は **地域医療連携室** まで

ご連絡お待ちしております～

患者総合支援センター地域医療連携室では、前方連携として病医院から紹介された初診患者さんが受診する際の予約業務を行っております。

医療を必要とされる方がスムーズかつ適切な医療サービスを受けいただけるよう、地域と当院をつなぐ架け橋となり、円滑な前方連携を図ることを役割とし担当スタッフ一同取り組んでおります。



現在、新型コロナウイルス感染症の拡大防止策として、外来予約申込時に「外来受診予約問診票」の記載をお願いしております。外来受診予約の際は診療情報提供書（貴院様式）、外来予約申込書、外来受診予約問診票をご作成、地域医療連携室直通FAX 011-811-9110へ送信してください。ホームページの地域医療連携室ご案内より様式のダウンロードができますのでご利用くださいますようお願い申し上げます。

患者さんの円滑な受診を図るため画像資料（CD-R）は地域医療連携室宛に事前郵送をお願いしております。遅くとも予約日の3日前（平日のみ数えて）まで必着で郵送してください。画像資料到着日を考慮したうえでの予約となります。

予約日時が決定次第、受診予約票をFAX送信いたします。30分以内の予約票送信を心がけておりますが、内容の確認に時間がかかる場合もありますのでお待たせしてしまうような場合は地域医療連携室から連絡をさせていただきます。

画像資料（CD-R）がない場合、診療情報提供書原本やその他資料（プレパレート・レントゲンフィルム等）は、当日持参するよう説明し患者さんへお渡しください。

早期受診に努めておりますが急を要する場合はDr.toをお願いしております。

FAXは24時間対応しておりますが電話対応は9:00～17:00となっておりますので翌日対応となる場合もございますのでご了承ください。

グランドオープンに伴い、スタッフ一同より柔軟に予約対応していきたいと思っております。何かあれば気軽にご相談ください、皆様からのご紹介をお待ちしております。

北海道がんセンター がん検診のご案内

完全予約制

● 4大がん検診

- ・腹部エコーにより肝臓を中心に観察
 - ・胃内視鏡（胃カメラ）による上部消化管検診
 - ・便潜血反応による大腸がんスクリーニング
 - ・低線量CTによる肺がん検診
- 毎週水曜日 ①14:00 ②14:20 ③14:40
毎週木曜日 ①14:00 ②14:20 ③14:40

● 腹部3大がん検診

- ・腹部エコーにより肝臓を中心に観察
 - ・胃内視鏡（胃カメラ）による上部消化管検診
 - ・便潜血反応による大腸がんスクリーニング
- 毎週水曜日 ①14:00 ②14:20 ③14:40
毎週木曜日 ①14:00 ②14:20 ③14:40

● 低線量肺がんCT検診

一般的な肺CTよりも少ない被ばくでCTが受けられます。
月～金曜日 ①12:00 ②15:00

● 乳がん検診

マンモグラフィによる検診
（エコーなどのオプションもあります）
毎週 火曜日・金曜日 14:30～

● 婦人科がん検診

子宮頸がん・子宮体がん検診
（エコーなどのオプションもあります）
毎週月曜日 9:00～
毎週木曜日 14:30～

● 前立腺がんのPSA検診

採血後2時間以内に泌尿器科医師より結果とその後の指示を受けられます。
完全予約制／月・木曜日 11:00

● 大腸がん検診

当院では予約日に消化器内科医師より直接検診結果を聞くことができます。
完全予約制／月～金曜日 14:00～

● 胃がん内視鏡検診

専門的な知識と技術を備えたスタッフが対応させていただきます。
完全予約制／毎週金曜日 ①9:00 ②9:20 ③9:50

● PET検診

全身を一度に調べることができます。
平日／月曜日～金曜日 10:30

予約受付センターの受付時間：毎週 月曜日～金曜日
電話による予約 13:00～16:00 / 窓口による予約 9:00～16:00

患者さんの権利

1. 人格が尊重され、良質な医療を平等に受ける権利があります。
2. 十分な説明を受け、自分が受けている医療について知る権利があります。
3. 自らの意思で、医療に同意し、選択し、決定する権利があります。
4. 個人のプライバシーが守られる権利があります。

患者さんの責務

1. 良質な医療を実現するため、医師等に患者さん自身に関する情報を正確に提供してください。
2. 納得出来る医療を受けるため、良く理解出来なかった説明については、理解出来るまで質問してください。
3. 他の患者さんの医療及び職員の業務に支障を与えないようにご配慮下さい。

患者さんへのお願い

院内の取り決めを守り、病院職員と協同して医療に参加、協力することをお願いします。

独立行政法人 国立病院機構

北海道がんセンター

都道府県がん診療連携拠点病院

〒003-0804
北海道札幌市白石区菊水4条2丁目3-54
代表 TEL (011) 811-9111
FAX (011) 832-0652
ホームページ
<https://hokkaido-cc.hosp.go.jp/>

QRコード→



● 相談窓口

がん相談支援センター
直通電話 (011) 811-9118
地域医療連携室
直通電話 (011) 811-9117
直通FAX (011) 811-9110
メールアドレス 100-mb05gas1@mail.hosp.go.jp

交通のご案内



- 【地下鉄】 地下鉄東西線「菊水駅」下車、3番出口より徒歩3分
- 【バス】 JR北海道バス「菊水駅前」バス停から徒歩約3分
- 【自動車】 札幌自動車道 札幌インターチェンジから約20分
※病院正面の駐車場は有料となっています（外来患者さんは1回200円、30分以内であれば無料）。できるだけ公共の交通機関をご利用ください